恋は本能を凌駕する？

ノービット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋は本能を凌駕する？

【Ｎコード】
Ｎ９３５６Ｋ

【作者名】
ノービット

【あらすじ】
ものぐさで興味の無い事には動かない２５歳のルカが、グータラ生活満喫中に突如、異世界に呼び出される。果たしてルカはどうなるのか？
ルカは容姿端麗、頭脳明晰、運動神経抜群の超美女。
しかし、無気力、無関心、無表情、無口、惰眠大好きです。
本能のままに生きていくルカ乞うご期待。

第1話　呼び出される？

第1話　呼び出される？

東京郊外。
２階建ての瀟洒な洋館が建っている。門から一歩入ると、玄関に向かって車寄せが有り、庭はローズガーデンでイギリスに来たと思わせる素敵な家である。洋館の周りは高い塀に囲まれて道からは洋館の屋根の部分が辛うじて見えるくらいで、プライバシーは完璧に守られている。
この洋館にどの様な人物が住んでいるのかと言うと、普通の会社員の父親、専業主婦の母親、家事手伝いの娘（２５歳）、大学院生の息子（２３歳）、大学生の息子（１９歳）のどこにでもいる普通の５人家族である。
なぜこのような洋館に家族が住んでいるのか？
一家の大黒柱の父親は、普通の会社員。肩書きは課長だがこの家を買えるほどの稼ぎは無い。
では親から受け継いだのか？
一家が家に越してきたのは7年前である。

あれは今から１５年前。日々子育てに追われる主婦がちょっぴり愚痴を吐いた事から始まりました。

「ねぇ～～ルカちゃん。このお家素敵よね～。こんなお家に住んで優雅に過ごしてみたいわ～。薔薇のお庭が素敵よね～」

主婦はイングリッシュガーデン特集が組まれた雑誌を見ながら長女に話しかけた。それは単に憧れ、ちょっとした夢を語っただけだったのでしょう。しかし、長女にとっては違いました。

母親は自分の世話をしてくれる人。ご飯をくれる人です。ご飯をくれる人は大事な人です。
長女は真剣に雑誌の写真を見ていました。
その間も母親は、ずっと庭と家の事を話しています。

「わかった。」

ルカは静かに答えました。言葉足らずな所が有る娘です。実際は話すのが面倒なだけですが、母親は素敵な庭と家の事で共感してくれた返事だと思いましたが、ルカの中では家をプレゼントするという返事でした。

「よかったわ～。ルカちゃんもそう思ってくれて、ママ嬉しいわ。」

母親は笑顔でニコニコしていますが、ルカは無表情でした。
ルカは小さいころから無表情でめったに表情が変わりません。かといって感情が無い訳ではなく、表情を作るの面倒くさがっている内に表情筋が動きにくくなっているだけです。家族はわずかな変化の、ルカの表情を読み取れます。ただし、この時は読み間違えました。
ルカは基本的に興味の無いものは目に入りませんが、家族の話はきちんと聞きます。この時の話もきちんと覚えていました。

ルカは考えました。家を買う。それにはお金がいる。稼ぐには頭が良くて、いろいろな事を知らないといけない。勉強するか・・・

今までは興味のある事以外勉強しなかったのですが、色々な事を勉強しだしました。
両親はルカがいろんな事に興味を持ちだしたので喜びました。どんどん成績が上がり普通の学校では物足りなくなりました。色々な論文が認められて、海外の学校に飛び級でスカウトされました。ルカ

は余り行きたがらなかったのですが、母親がご飯を冷凍して送るからと言うとあっさりと行きました。

そうして8年。数々の博士号を取得しルカが日本に帰って来てしばらくした時の事、家族そろって朝ごはんを食べている時にルカが爆弾発言をした。

「明日みんなで引っ越すから。」

家族みんなはいきなり何を言うんだとルカに詰め寄ったが、ルカは詰め寄るみんなに家の権利書などの書類を提示した。びっくりした家族全員で家を見に行くと、素敵な洋館。母親は大喜びである。父親は「大黒柱は俺なのに」と呟き妻に慰めて貰おうとしたが一蹴され、隅っこで息子たちに慰められていた。
母親はきゃーきゃー言いながら家中を見て回っていた。ルカは母親のそんな様子を満足そうに見てた。

ルカは容姿端麗な両親から生まれたので、もちろん容姿端麗。頭の良さはまさに天才。それに女性としての魅力あふれるナイスプロポーション。身長は父親に似て大柄で１７８センチある。そして運動神経も半端無くいい。海外ではその黒く長いうねった髪と黒い瞳、美しい姿に無表情もミステリアスだともてまくっていた。言葉が少ないのも物静かで思慮深いからと思われていました。まさに神に愛されていると。

家を手に入れてから7年。ルカはずっとごろごろしていた。熱帯を模した温室の中で惰眠を貪りながら。正に3食昼寝付き。ルカの理想の生活である。神に愛されしルカは、極端なものぐさだった。本能のままに生きている。
お金はごろごろしている内に、自作のプログラムが株取引で稼いで

くれる。外にはめったに出ず、研究の勧誘なども蹴っていた。偶に出かけても一人で飲みに行くくらいである。家族はそんなルカを心配していたが、そのうち興味がある事を見つけて動き出すだろうと思っていた。

そんなグータラ毎日を過ごしていてもルカは美しかった。ますます美女に磨きが掛っていました。まあこれは遺伝子の神秘でしょう。

ある日家族で朝食をとっている時の事（朝食は家族で取るのが決まりです）、いつも通りルカ以外が話しルカは聞き役です。
ルカは変な気配を感じました。ルカが周りを見渡していると、家族が話を止めてルカを見ました。
ルカが気配に敏感な事は知っていましたから。そうしたら二男が「あッ」と声を出しました。
ルカの体が光って居るからです。家族は息を詰めてルカを見つめました。
体がだんだんと透けて行っていました。慌てて家族がルカの体を掴もうとしますが掴めません。手は体をすり抜けます。

「もどってきてーー！！」

と母親が叫びました。

「わかった。」

とルカの声が聞こえたような気がしましたが、完全にルカは消えてしまいました。

家族は茫然と取り残されていました。

第2話　予想外？

第2話　予想外？

ロンヒール大陸にあるアルトレン国。大陸の４分の１を占める歴史ある大国だ。その大国の信仰の中心。首都ルルビスにある神殿にて、１年の感謝を捧げる神事が行われていた。
神殿には王族を始め、主だった貴族たちが集まり神官たちが祝詞を捧げる様を見ていた。
アルトレン国の祭る神は、この世界アーズウェンドを作ったとされるタキオン神である。タキオン神は黒髪、金の目の美丈夫で誕生と死を司ると言われている。生命が廻るためには欠かせない物である。また、文武両道で素晴らしい武勇を誇りどの様な問いにも答えたとされるパーフェクトゴットである。
「神様は何でも出来る」の見本である。だからものすごく信仰されている。
かといって他の神が冷遇されているかと言うとそうではなく、それなりに信仰されている。農業の神サラバン、美の女神アーニス、海神オンディーニュなど。

まあとにかく、神事である。
神官たちがタキオン神の像に向かって祝詞を唱えていると、タキオン神の像が輝きだした。周りの貴族達がざわめく中、それでも神官たちは祝詞を紡ぐ事を止めずに唱えている。中断は禁止されているのだ。この祝詞は神話の時代から伝えられているもので、神を讃える物と言われているが神聖語の為、解読されていない言葉もある。
途中で止めるのは神に対する不敬だとして公式の場では罰せられる

のだ。
もちろん練習中はどこで止めてもオッケーです。
さあさあ、光っているタキオン神、気になるけど一生懸命に祝詞を唱える神官たち、ざわめいて食い入るように像を見つめる王族、貴族のオーディエンス。
舞台は整いました。何が起こるのか？
おおっと！！ついに神官が祝詞を唱え終わりました。そしてタキオン神像を見つめます！
光が像から離れて、像の前に集まりました。集中する視線！！
その時、神殿に居る全員の頭に声が響きました。

「我が愛し子ルカだ。よしなに・・・自由にしてやってくれ」

声が神殿中に居る人に響き渡りました。
その声は低く、力強く、とても魅力的で老若男女問わずうっとりする美声だった。
神官、王族貴族達がその美声に酔いしれて居るとだんだんと光が弱まってきている。
かずかずの強烈な視線が集まる中、皆息をのみ食い入るように見つめる。
光が収まりその中から顕われたのは、まっ黒な毛、輝く金色の瞳、美しい姿の・・・

黒ヒョウだった。

「おーーー」「神の奇跡だーー！！」「すばらしい！」などなど、神官貴族達がざわめいている。中には涙を流して居る神官も居る。皆の顔が興奮で輝いている。正にカオス。

その中にあって黒ヒョウは、まわりの視線など気にして居ないようにきょとんとした顔（多分）で、自分の手足、尻尾を見ている。

収拾がつかなくなって来た所、

「みな静まれ！！」

と声が響いた。まさに鶴の一声。国王様の声。とたんに皆口を噤み国王様を見る。

アルトレン国国王、ジョーウェスター・オル・アレン・アルトレンさま。

４６歳。５人の子持ち。奥様亡き後、独身を貫くロマンスグレーでグリーンの目の素敵なおじ様。

市民の生活環境の改善、市民からも実力のある物を取り立て、身分に囚われず実力主義。貴族には、市民の見本となる貴族たれ。と圧政を許さず、身分を笠に着る馬鹿貴族どもを粛清しまっくたお人。当然市民からの人気は絶大。貴族からもまさに正しい王族として評価が高い。後妻を狙う女性が後を絶たないモテまくり。まさにカリスマ。ファンクラブもあるらしい。

「皆落ち着け。まずはルカ殿の処遇を決めねばならん。神官長、宰

相、５候、将軍達以外は解散してくれ。」

国王の命令に人々は名残惜しそうに礼拝堂を出て行く。

「父上。どういたしましょう。先ほどの声はタキオン神なのでしょうか・・」

国王様に話しかける皇太子のアレクシオン。
タキオン神が愛し子と申した言え、黒ヒョウ。獣である。顔が緊張し、目はルカから離さない。
この世界にはヒョウは居ない。しかし、似た獣が居るので警戒している。神聖色の黒を纏っているので黒ヒョウが現れても攻撃されなかったのだ。

「そうだな。取り敢えず国賓という形をとって王宮に部屋を用意しよう。神の愛し子だからな。粗末な扱いは出来ん。かといって自由に、と仰っていたから閉じ込める訳にもいかんし、警備が大変だ。まずは移動だな。」

「陛下。王宮に移動してルカ様に休んで頂き、その間に民への公示とルカ様の処遇を考えましょう。
貴族達から話を聞いた物たちが来るまでに移動しなければ。」

「あぁ宰相、分かっている。抜け道を通って城に移動したいんだが、ルカ殿をどうしようかと。」

大人たちがこれからの対策を話している内に、この中の最年少、国王の３男フィリップがルカに近寄って行った。その様子を見咎めた皇太子が緊張してそのやり取りを見詰める。まわりの大人たちも見詰める中、ルカがフィリップに抱き上げられた。その大人しい様に

一同の緊張がとかれた。

「さあ移動しよう。」

国王の声に周りは一斉に動き出し、周りを警戒しながら国王を中心に城に移動していった。

第3話　愛し子？

第3話　愛し子？

変な気配を感じ、朝食の席から消えたルカはまっ暗い空間を引張られる様に移動していた。
相変わらず無表情なルカだが、ちょっぴり嬉しそうでもある。何を隠そうルカは、超常現象の類が大好きなのである。今現在の自分の状況が楽しくて仕方が無いのです。
内心、これからどうなるんだとわくわくしながら変化を待っていました。その時、

「楽しんでいるかい我が愛し子よ。」

と、とっても魅力的な声が聞こえてきました。
慌てる事無くルカは、返事の代わりにコクンと頷きました。

「それは良かった。私はタキオンと言う。よろしく。これから私の作った世界に遊びに行って欲しいんだよ。ルカは元の世界にはもう、興味を引く物が無かっただろう？　気分転換にイイかと思ってね。良かったかな？」

声曰く、タキオン神。結構強引な所があるお方です。まぁ神様ですからね。
ちなみに愛し子と言うのは神様たちにある制度で、神様と波長の合う魂に加護を与えて生まれてから死ぬまでの間様子を見るという制

度。人間を身近に感じるように、う～ん、映画を見る感じかな。
もちろん見られる方は堪った物では無いけれど、それなりに加護は与えているから良いだろう。という感じです。見ているだけでは無くて、直接ちょっかいを掛ける場合もあります。
今回のタキオンの様に。

「家族は？」

とルカがタキオンに聞きました。

「後で手紙を書くと良い。届けてあげるよ。」

ルカはホッとしたように息をついた。突然消えたルカを心配して居るはずだから。消息を伝える事が出来れば安心するでしょう。ちょっと海外ならぬ異世界旅行に行くだけなんですから。

「そうだ。姿を少し変えてもいいかな？邪な事を考える人が居るといけないから、自分の身は自分で守るんだよ。あと、言葉は通じる様にしておいたよ。何か困ったことが有ったら、心の中で話しかければ聞こえるから、話しかけなさい。」

「ありがとう。」

「さあもう着くよ、楽しんで。」

タキオン神の声が途切れると、ルカは光に包まれていた。
眩しさに目をつぶる。恐る恐る目をあけると、ぼやけた視界の中に大勢の人たちが見えた。

ふと体に違和感を覚え、体を見下ろしてみた。毛皮だ。毛皮の服？
パチパチと瞬きする。
手足が猫に成ってる！！これにはさすがのルカの無表情も耐えられず、大きく目を開きびっくりした表情を作った。視界の端に動く物が眼に入ってよく見ると、シッポだった。

（私猫に成ってる！姿を変えるってこういう事だったんだ。）

しげしげと自分の体を見て、いろんな動きをしてみた。面白そうに、爪を出したり引っ込めたりしている。興味しんしんだ。普通は体が変化する事など無いので、ルカはとても興奮していた。

一頻り体を動かして遊んでいたら、周りの人の気配が少なくなっている事に気がついた。
不思議に思って周りを見ると、大分人数が減っている。

一人の青年が近づいてきた。弟と同じぐらいだろうか？嫌な感じはしなかったので、特に何もせず近寄ってくるのを見ていた。
青年はルカの前、１メートルぐらい離れて膝を付きルカに目線を合わせた。

「お初にお目にかかります。ルカ殿。私はアルトレン国国王が子息、フィリップです。この場から王宮に移動したいと思っていますので、お体を抱き上げる事を許して頂けますでしょうか？」

ルカはじっとフィリップを見詰めた後、コクンとうなずいた。
フィリップがホッと息を吐き、手をゆっくりと差しのべてきたので、その手に体を摺り寄せた。
ふわりと体が浮き、フィリップの片腕に座るように乗せられる。

（目線が高い？平均身長が高いみたい。この世界はみんな大きいのね。私も大きい猫に成ったし。王宮って言ってたわね。王子様だし。王家のペットになるのかしら？ご飯が心配だな～　猫飯か？）

などとルカは考えている。元のグータラ生活もペットと変わりない生活をしていたので、ペットでも抵抗はない。ご飯の心配だけである。でっかい猫、つまりヒョウ生活を楽しむつもりだ。グータラ生活は世界が変わろうとも変えない予定である。興味を引く事が無い限りは。

フィリップは、神の愛し子に対する好奇心と、身分が有り若輩で替えの利く立場からルカに近づいたが、抱き上げた体の心地よさと毛皮の滑らかさ、大人しく腕に抱かれている様の愛らしさに夢中になりそうだった。このフィリップ。動物大好きなのである。

（よかった～三男で。父上や兄上たちは、愛し子といえ見た事の無い獣でケガの心配があるから近づけ無かったけど、大人しいし、かわいいし、懐くと良いなぁ～　一番に触れてよかったなあ～　そういえば言葉は通じるみたいだし、仲良くなりたいな～）

などと考えている。国王の号令のもと王宮に向かっているが、羨ましそうな視線をちらちらと感じていた。フィリップの顔は得意げである。調子に乗ったフィリップ、

「ルカ殿、毛皮を撫でてもいいですか？」

と聞いた。ルカはしばし考えたのち、まあいいかと思いコクンと頷いた。

許しを貰ったフィリップは嬉々としてルカの体を撫でまわす。その滑らかな感触を楽しんでいた。

撫でられたルカも、さすが動物好きなだけあって気持ちがよく、フィリップにすり寄り喉を鳴らした。
猫が喉を鳴らすのが分かるくらい気持ちがいい。今は猫だから良いか、と心地よさに身を任せ本能のままにすり寄った。本当にいいのかルカ？！人間のままなら大問題だぞ～

（今は猫ライフを楽しむのだ！！）

と、気持ち良さにウットリしている内にうとうとしてきて眠りに引き込まれていった。

第４話　ペット？

第４話　ペット？

心地よいまどろみの中、誰かが体を撫でている。
意識がふわふわと浮かんでいる中で、どこからか話し声が聞こえる。

「では、処遇が決定したのですか？」

「あぁ、後の小細かい事を詰めて国民に公示するそうだ。私は先に説明に来たのだが、まだ起きられないようだな・・・・」

「そうですね、気持ち良さそうに・・・・・」

（うん？誰か話している。そういえばタキオンが…異世界だっけ・・？）

ルカが現状を思い出し目を覚ますと、４つのグリーンの目が自分を見つめていた。
視線を気にせずに周りを見渡すと、どこかの部屋のソファーに横になっている。頭はフィリップの膝に乗っており、フィリップが体を撫ぜていたようだ。
寝転がって居るのも失礼だな、と思い体を起してソファーの上にお座りの形で落ち着く。

フィリップは知っているが、もう一人のグリーンの目をした人物は

誰だろうかと視線を向ける。
彼は、こちらの動きをずっと見ていたようで視線が合い話しかけてきた。

「起きられましたかルカ殿。私は皇太子のアレクシオンと申します。神の愛し子たるルカ殿にお会いできとても嬉しく存じます。」

ルカも挨拶をしようとしたが、喉がらは「グルル」としか出なかった。

（この姿では話せないのか）

残念に思ったが、生来無口なのでそれほど不便には感じずに、まあいっかで済ませた。
ペコリと頭を下げて挨拶をした。余り細かい事は気にしない性格をしているのだ。

挨拶を返されたアレクシオンは、嬉しそうに笑みを浮かべた。
もともと整った精巧に形作られた彫刻のような顔、美形だが美人と形容されるような顔である。笑顔を浮かべると破壊力抜群。男女問わずもてそうだ。うっとうしいほど色々寄ってきそう。
ちなみにフィリップも美形。男性的な男らしい美形だが、まだ若い所為か少しやんちゃな感じがする。

2人の美形に囲まれていてもさすがルカ。特に反応を見せない。
ルカにとって姿形、美醜はどうでもいいのだ。外見には価値を見出さない。ただ綺麗だな、と思うだけである。

「ルカ殿、言葉が分かりますか？分かったら右前脚を上げていただけますか？」

アレクシオンに言われたルカは素直に手（前足）を上げた。

「ありがとうございます。良かった。言葉は通じる様ですね。」

ホッとして息を吐くと、ルカのこれからの立場を説明しだした。

要約するとこうである。

・タキオン神の愛し子たるルカを神獣とし保護する。
・生活は王宮で。
後宮にある青緑の間にて（後宮とは王族の居住区）警備しやすいため。
・行動は自由だが、護衛の人間がつく。
・食事などは用意する。
・食事は王族と。
・城の人間は襲わないで欲しい。

など、色々言っていた。ルカはこれって王族のペットかしら？など思ったが、スルースキルで流した。

「このような形で良いでしょうか？　後は、コミュニケーションの取り方を考えないといけませんね。言葉は発っせられないようですし。」

「兄上、紙に文字を書いて指して頂いたら？」

フィリップはそう言って、紙を用意してさらさらと文字を書いていく。

書かれていく文字は知らない形をしているが、読む事が出来た。表

音文字の様だ。

「文字は分かりますか？ではルカ殿、指してみてください。」

そういってフィリップは紙の端を押さえ、興味津津にルカを見た。アレクシオンも好奇心で目を輝かせながらルカを見ている。見詰められたルカは、ソロソロと手を出していく。しかし、手よりも文字の方が小さいので猫手でどの文字を指したのか分からなくなる。ちょっと考えたルカは、爪で指す事にした。ピンっと1本の爪を立てる。

爪の長さは6センチぐらいあるので、それなら手が邪魔になる事無く文字が見えるだろうと。

紙に迫っていく爪。2人が見守る中、ルカの爪が一つの文字を刺した。

そう、刺した。見事に爪は文字を突き刺し、テーブルにまで刺さった。それも根元まで。

紙を押さえていた、フィリップの手のすぐ横だった。

どうやらルカの爪はかなり鋭利なようだ。

顔を青くした2人が見守る中。ルカはソロソロと爪を引き抜き、ソファーから降りて部屋の隅に行き壁に向かって項垂れた。その背中は暗く、誰がどう見ても反省しているように見えた。

ルカの頭の中にはタキオンの「自分の身は自分で守るんだよ」、と言っていた言葉がぐるぐる回っていた。

第5話　変身？

第5話　変身？

あれから二人に慰められ、「気にしないで」と言われたので気にしない事にしたルカ。新しい体に早く慣れようと決意した。
取り敢えず、呼び捨てでいいと伝える事が出来た。そして用意された部屋に移動した。
青緑の間は、二階に位置しているがテラスからは庭に出る事が出来る。部屋は広く、床に厚手の絨毯とクッションが置かれ、背の高い家具が無いので視線の位置が低くなった体でも快適そうだ。
流石王宮、手配が早い。

今日は慌ただしいからと、部屋で食事をとる事になった。
アレクシオンは用事が有るからとフィリップと2人である。食事は部屋の前まで運ばれ、そこからはフィリップが運んだ。ルカを余り刺激しないようにとの配慮だ。

テーブルに配膳しルカとフィリップは床に座った。
ルカの食事もテーブルに置かれた。一瞬フィリップは床に置こうとしたのだが、ルカがテーブルの前に座って待っていたのでテーブルに置いたのだ。今回の二人の食事はルカの様子見も兼ている。
流石に王宮でも獣の国賓は初めてで、探りながらの対応である。部屋に使用人が入ってこないのもその為だ。

（生のお肉だ。）

ルカの食事は、一口大に切られた何かの肉だった。せっかくでっかい猫(ヒョウ)に成ったのだからと、恐る恐る食べると美味しかった。どうやら味覚も変わっているようだ。
ガッツク事無く上品に食べて行くルカにフィリップも安心して食事をした。これなら人に見せても大丈夫だと。食事は王族と共に取る事になっているのだが、ダイナミックに食べられたらどうしよう、と話し合われていたのだ。
ルカは神の愛し子。神と同列で立場的に王族よりも上だ。しかし獣。対応を王宮中で模索中。
厄介な客である。

「美味しい？」

コクンとルカが頷く。
フィリップの顔がニヤケて崩れている。本当に動物好きらしい。
そんな視線をものともせず、ハムハムと肉を平らげて行く。余ほど美味しいらしい。

食事を終えしばらくすると、何か用事が有ったら部屋の前に警備が居るからと言って帰って行った。
これから明日の朝までは一人。知らない人に囲まれて気疲れしたルカはゴロゴロすることにした。

夜も更けてきて、ハッとルカが眼を覚ました。
ゴロゴロしている内に、眠ってしまったらしい。そういえば家族に手紙を届けてくれるとタキオンが言っていたなと思い。

（どうやって手紙を書くんだろう？）

ルカは猫手である。ペンなどとても持てない。いや、練習したらもてるのか？

などぐるぐる考えていると、タキオンが困ったことが有ったら話しかけろと言っていたな、と思い出した。

（タキオン。タキオン。困っています。返事をください。）

と、心の中で話しかけた。

「やっと話しかけてきたかルカ。どうした？」

超美声のタキオンのお返事。相変わらずいい声。

（でっかい猫だから、家族に手紙が書けない。どうしたらいい？）

「でっかい猫って。その姿は黒ヒョウだぞ？まあいいか。元の姿に、と念じれば戻るぞ。やってみな。」

ルカは素直に念じてみると、あら不思議。獣の姿から人間の姿に変わりました。

しかも何故か、体にピッタリとした黒のライダーズスーツを着ています。

「おお出来たな。その服は基本形だ。変化する時に念じれば違う服にもなるぞ。裸がいいなら、裸と念じろ。人型に成る時服を着ていないと困るだろうからオプションだ。」

（ありがとう）

ルカは確かに裸は困るな～と思ったので喜んだ。これで手紙が書ける。

書いたらどうすればいいんだろう？

（書いた手紙は？）

「これに乗せておいてくれ。向こうにも同じ物を送るから文通できるぞ。」

ルカの傍らに、金色の四角いトレーが現れた。これで家族との連絡手段が出来た。

（ありがとうタキオン。）

「また何かあったら呼びかけなさい。我が愛し子。」

そう言って声は聞こえなくなった。

ルカは早速部屋をあさり、筆記用具を見つけると手紙を書いた。

書いた手紙をトレーに乗せると手紙が掻き消えた。さすが神様の道具。後は返事を待つだけ。

そのうち届くだろうと、ルカはヒョウの体に戻る事にした。

今はヒョウの体が楽しい。元々グータラなルカには猫の体がよく馴染んでいて、人型よりも気にいっている。だから当分獣体でいるつもり。

こうしてアルトレン国に来た神の愛し子が、超美女だという事は誰

にも知られる事が無く、神獣、獣として認識された。
誰がいつ気がつくのか？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9356k/

恋は本能を凌駕する？

2010年10月9日21時28分発行